

特集

副会長就任にあたって

青山 博之 / HIROYUKI AOYAMA

私は、日本工学アカデミーに入会して以来、会員選考委員会のお手伝いを少しやらせて頂いた外は、何のお役にも立ってきませんでした。このたび会員選考委員会の委員長を仰せつかった事から、図らずも副会長の末席を汚すことになり、大変光栄なものと存じながらも、身に余る大任と戸惑っております。

最初に、会員選考委員会の立場から、ご挨拶に代えて、この委員会の事をご説明したいと思います。皆さん良くご存知の事ではありますが、会員選考委員会は、第一分野から第六分野までの各分野の委員、それぞれ7、8名ずつから構成され、年3回程度開催されています。そこでの最大の議題は、申すまでもなく新正会員の推薦でありまして、推薦書に基づいてまず所属分野の審査が行われ、次いで全体委員会で慎重に審査されます。推薦と決まった会員候補者は、次の理事会に諮られて正式決定となるわけです。

日本工学アカデミーを更に発展させて行くためには、会員の増強が必要である事は、申すまでもありませんが、その元は、会員選考委員会に寄せられる推薦書であります。会員の推薦は、現在会員である皆さんがどなたでも出来る事でありまして、決して選考委員に限られている訳ではありません。選考委員が普段から会員の増強を考えている関係上、結果的に選考委員からの推薦書が多くなっておりますが、本来は全会員から推薦書を頂くのが建前であります。日本工学アカデミーの会員にふさわしい方は、皆さんの周りにも沢山いらっしゃると思いますので、そのような方を多数ご推薦頂けるように、この際特にお願ひしたいと思います。

次に日本工学アカデミーを外国の同様の団体と比べたとき、感じられる一つの特徴について申し上げます。外国の団体といっても、私の知っているのは私がforeign associateの一人になっている米



国のNational Academy of Engineeringだけですが、日本工学アカデミーと比べた場合、際立った違いは、米国のNAEが政府諸機関の諮問に答えるなどして政策立案に直接かかわっており、会員相互の研鑽という点に比べ、日本工学アカデミーは前者がほとんどなく、後者にウエートが置かれている事があります。

このようになった大きな原因は、米国ではNAEのみならずNAS (National Academy of Sciences) もIOM (Institute of Medicine) も、もともと国の政策立案機構として設立されており、したがって諸官庁が政策立案にあたり民間の意見を反映する必要があるとき、それらを利用するのが当然となっているのに対し、わが国の各省庁はそれぞれに審議会などを持っていて、これにその役をさせている事があります。審議会などの諮問機関が現在のように沢山作られるようになったきっかけは、恐らく戦後まもなくの学術会議問題にあるのでありましょう。学術会議が学術全般に関する国の諮問機関になると期待されて発足したのに、周知の事情によりその任を果たし得なかったから、国側はやむを得ず

自前の諮問機関をつくり、しかもそれが甚だ都合が良かったので、今のように増殖したのではないのでしょうか。

学術会議の各部をバックアップする組織として各分野のアカデミーがあり、工学で言えば第五部と工学アカデミーが提携して、各省庁の抱える工学的諸問題に関する諮問に答えるといったような体制が、本来あるべき望ましい形ではないかと思います。現在の体制が全く違うのは

不幸な事であり、悲しむべき事だと思います。日本工学アカデミーは、日本の工学に関する最高権威者の集まりとして、今までにも色々な問題に関して発言してきましたが、今後ともそれを継続するとともに、更に、各省庁の審議会に対する諮問事項のような個別の具体的事項についても発言して、その存在意義を広く社会に、とりわけ政府諸機関に、認められるようにする事が望ましいと思っています。

特集

副会長、会員選考委員会委員長退任に当たって

堀 幸夫 / YUKIO HORI

このたび日本工学アカデミーの副会長および副会長として仰せつかった会員選考委員会委員長を退任させていただいたので、この機会に昔の思い出や思いつくことを少し記してみたい。

昭和61年6月、当時東大工学部にいた私の部屋に大先輩の杉本正雄氏（後に監事、副会長）が見えて、いま日本工学アカデミーの設立準備をしているが、幹事をやってくれないかとのことであった。このようにして私は工学アカデミーの設立準備に参画することになった。

工学アカデミーの設立総会はそれから約1年たった昭和62（1987）年4月16日、東京丸の内の日本工業倶楽部で行われた。初代会長は小林宏治氏、設立時の会員数は417名であった。私は理事の一人に加えられた。昭和63年5月30日に最初の通常総会が開催され、以後、毎年同じ時期に東京で通常総会が開催されるようになった。これとは別に昭和62年から平成4年まで、秋に、大阪、京都、名古屋で臨時総会が開催された。

工学アカデミーの初期（平成4年5月まで）、私は総務理事を仰せつかった。当時の総務理事は現在の専務理事の仕事の一部を担当しており、会議の準備、司会など結構忙しかった。平成3年10月、桜井宏前専務理事が見えるまでそれは続いた。

昭和63年11月には工学アカデミーのロゴ（日電デザイン）が出来上がった。これはなかなかしゃれたデザインで、ロゴの円を地球儀と見な

すと、E A JのJがちょうど日本の所、Aはアジア大陸、Eはヨーロッパの所にあるというのが私の解釈である。

日本工学アカデミー正会員の年会費は10万円、これはかなりの高額である。高すぎないかという議論は当初からあったが、大勢としては、それでゆくということであった。これは会費というより、ボランティアとして工学アカデミーの活動をサポートしていただくという意味もあるということであった。それにしても高額と思われたので、私は平成2年1月の理事会に「満80歳に達した次の年度から会費を免除」という案を提出し、認めていただいた。金の切れ目が縁の切れ目というのでは余りに情けないと思ったからである。その後、満75歳に達した次の年度から、および満55歳未満は半額免除という条項が追加されて今日に至っている。

会費の問題は本当に難しい。会費を半分に下げて、その代わり会員数を2倍にすることも考えられるが、会費を半分にしたとき本当に会員数が2倍になるかどうかは分からない。会費の改定は工学アカデミーの存立に関係してくるわけである。

平成2年には賛助会員制度の新設などもあっ



た。

平成5年5月私は、当時副会長、会員選考委員会委員長であった中川良一氏の後をお受けし、本年5月までその任にあった。会員の増強については努力したつもりであるが、現在の会員数は約600名、近年はほぼ横這いの状況にある。会員の増強といっても、会員は何よりもそれに相応しい人でなければならず、その上でもう少し増えてほしいものであった。会員については、関東地区に偏りすぎているとか、平均年齢が次第に上がってゆくとかいろいろの問題もある。とくに私が気にしていたことは、どうしたら全国のなるべく多くの会員に工学アカデミ

ーの活動に参画していただけるかということであった。これは会員の増強に直接関係することでもある。これまでも地区講演会などでいろいろご無理をお願いしご協力をいただいていたが、思いつく一案としては、ITの活用が考えられる。すべての会員にご関心のいずれかの部会(複数でも良い)に入っていただき、遠方の場合には何らかの方法、特にEメール等を使って密な連絡をとり、またはフォーラム的に意見交換をする便を提供することが考えられる。如何なものであろうか。

日本工学アカデミーのさらなる発展を切に祈る次第である。

特集

初心に帰って一さはさりながら

得田 与和/TOMOKAZU TOKUDA

自動車メーカーの研究開発畑で35年、次いで研究助成財団で6年勤務し、この5月の総会で専務理事に選任されました得田です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

実は昨年末、頭の上がない先輩から、アカデミーの専務理事を引き継がないかと打診された時は大いにまごつきました。

私はおよそ十年前に、元上司の口利きでアカデミーに入会し、教科書・参考書で存じ上げていた先生方にお目にかかれ、無邪気に、気軽にアカデミーを楽しんでいたにすぎません。もっとも正直に言えば、年会費10万円はちょっと高いなあと思っていました。

ともあれこれを機会に、あわてて色々調べ、考えてもみました。

まず本会は98年1月に、永年の悲願であった社団法人になりました。すなわち世の中から公益法人であることが認められたわけです。しかし公益社団法人とはそもそも何でしょう。

業界の機関誌ともいえる「公益法人」の社団法人特集(1977年!)をみると、まず社団とは、‘特定の人々の利益でなく、社会全般の利益を追求する団体’となっております。これは問題ない。ところが、その‘社員は、社会への奉仕者との自覚のもとに、私財を寄付しながらでも運営に参加する選ばれし人で、見返りは誇りと

名誉である’、となっているのをみて愕然としました。とても私はそんな高邁な志はもっていません。

入会早々、「君イ、会費なんて社会へのご恩返しのもりで払わなきゃ」と大先生からたしなめられたのを、思い出し恥じ入るばかりです。

とはいうものの10万円は低くはない。私の日常の匹敵費目にスポーツジムの年会費12万円があります。これとて安いとはいえませんが、ともかく週1回は役に立っている。比べるのは不謹慎と叱られそうですが、人間誇りと名誉だけでは息切れします。特に関東以外の方々はそうでしょう。庶民感覚ながらやはりそれ相応に、会費に見合った何かヨイことが実感できなければ、長続きはしないのではないのでしょうか。

さて、次に‘会員は選ばれし人々’という点を考えてみました。

まず本会の設立趣意書や定款をみますと、会員は‘産官学の分野で、工学、科学技術及び関連領域に関して、著しい貢献をした、広範な識



見を有する、指導的立場にある人’となっております。

私などよく入会を許されたものとおじけづきますが、アカデミーはこの十年会員数はほとんど変動なく約600名です。適性規模でしょうか。

手元の全国大学要覧(平成10年版)の頁を繰って計算してみますと、工学部入学者は毎年全国で100,360人です。これが40年間継続していたとすれば、今52,3才から62,3才の工学部出身者は全国で百万人はおられることになります。

この母集団から、前記当会会員要件の前半をクリアされる適格者を何名と推計するか。またまた大雑把と叱られそうですが、1/1000、千人はおられるのではないかと。ちなみに、年会費4千円の学士会10万人会員中、工学関係は15,700名と推定できます。結論的に、周辺も考慮すれば、当会会員にふさわしい人は1000~1500人と考え

ても不当ではありますまい。とすれば、もっと積極的に‘推挙’されてしかるべきとなります。

といっても、前にのべた会費ともからみ、何よりも当会の崇高な目的ともからみます。

ぜい弱な財政事情を脇目にしながら、何やら卵と鶏の問題に入り込み頭を抱えるばかりです。

ここで遅まきながら、先輩の打診は優しい打診ではなく、否応いえない命令であることにはたと気付きました。観念してお引き受けするよりほかにありません。もっともやるからには楽しくありたい、と精一杯努力いたしますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

‘オイオイ、こんなのにやらせていいのかい’と思われ、何らかのアクションをとってくださる方が現れるならば、この小文の望外の効果で、もって瞑します。

特集

専務理事退任にあたって

桜井 宏 / HIROSHI SAKURAI

いつの間にか8年半が過ぎてしまいました。職業人となってから47年ですが、これまで一番長く同じ仕事を続けたのが4年3ヵ月でしたので、アカデミーの仕事はその2倍の期間続けさせて頂いたことになります。偶然の一致かどうか判りませんが、この一番長かったアカデミーと二番目に長かったところの印象が非常によく似ています。それは日本の社会がルールを変更するのに極めて慎重であり、臆病であり、また時代にそぐわなくなっても既得権益の維持に強硬であることです。またそのためにルールの変更がタイミング良く行われなため、歪が大きくなりすぎて却ってその変更が出来にくくなっている例も多いようです。この印象については、また何かの折にお話したいと思っています。

日本語の表現に「雑魚(ザコ)の魚(トト)まじり」というのがありますが、この8年半は内外ともこの表現がピッタリの期間でした。日本工学アカデミーのお世話をさせて頂いていますと多数の超一流の工学関係の学者の方々や企業幹部の方々とお話する機会があります。いろいろお話していると昔世の中で常識と考えられ

ていた象牙の塔にこもって、世俗的なことには全く関心なく学問一筋といった学者の方々は少なくとも日本工学アカデミーの会員としては少数派であることを知りました。また御自分の専門以外のこと

にも非常に造詣の深い方々が多数おられることも知りました。この様な立派な方々の多数と面識を得、御一緒に仕事が出来たのは、自分として大変有意義なことであったと感謝はするものの、雑魚の魚まじりの感は否めません。

専務理事として仕事を始めた頃は、創立の方々が比較的高額の年会費を決定して下さったものの、活動のためのシステム作りが遅れたため、毎年剰余金が蓄積し、国際シンポジウムを主催しても、全額はつかい切れない状況でした。それまでの会社員生活では、会社に余裕資金のありそうな時には、自分の考えている投資



対象や開発テーマを積極的に売り込んだものでしたが、アカデミーの場合事業計画に賛同するばかりでなく、自発的に働いて下さる会員の方々がいなければ全く仕事が進みません。従って任期の前半は、理事会の御意見を承りながら、その枠内で活動を自発的にやって下さる会員を探し組織化する、どちらかといえば待ちの姿勢の仕事の進め方をとらざるを得ませんでした。自分自身の自己批判としてはreactive－受動的／反応的であってproactive－自発的（最近流行の英語で外部からの働きかけに反応するのではなく、自分から打って出る態度のことで新しい辞書には出ており、研究開発や新規事業に望ましい態度と考えられています。）でなかったことと思います。現在は不況による収入減もありましたが、事業の優先度により予算の査定をしなければならなくなったことは、活動のためのボランティアの協力システムがここまで出来たことと一応満足しています。

もうひとつの「雑魚の魚まじり」は国際関係の方で、CAETSの会合の度に痛感しました。CAETSは1991年に日本の入会を承認し、私は

1992年の第9回の総会から1999年の第13回まで毎回参加し、総会のない年の管理理事会やその下拵えのためのWGなど合計10回以上他のメンバーアカデミーの方々とお付き合いしました。CAETSでは全メンバーが対等の立場で国際交流を図っています。しかし米国、英国やスウェーデンの様にアカデミーの伝統があって社会的影響力が大きく、財務基盤がしっかりしているメンバーや、中国の様に政府まる抱えで事務局スタッフも40人以上といったところの中に入るとどうしても雑魚の悲哀を感じざるを得ません。それでも各国代表の中で何とか一人前にやってこられたのは会員の皆様の御指導、御支援の賜と感謝している次第です。

本当に長い間有難うございました。頭と体が元気なうちは一会員として国際委員会などに参加させて頂くほか、この3月に行われた国際シンポジウムのプロシーディングスの編集など若干の完了しなかった仕事の後始末もお手伝いすることになっておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます、退任のご挨拶に代えさせていただきます。

特集

広報委員会委員長をお引き受けして

伊藤 學 / MANABU ITO

本年度から広報委員会の委員長をお引き受けすることになりました。これまでの2年間、担当理事ということでこの委員会に参画してきましたが、今後は更に重い責務を背負うことになります。会員の皆様方のご協力とご支援をお願い致します。

工学アカデミーの委員会に関する内規では、広報委員会の目的を「アカデミーの事業を会員及び社会に広報するための窓口となり、その方法、内容等について基本的な方針を決定すると共に、印刷物等の企画編集を担当する」としています。これに対応して、隔月に開かれる委員会の会合では、EAJ NEWSの編集と、談話サロンを中心とする各種講演会の内容を記録したEAJ Informaitonの刊行企画を主たる業務とし、インターネット・ホームページの内容などについても意見を求められてきました。しかしなが

ら、これらはいずれも主として会員を対象とするもので、上述の目的の中に含まれている社会への広報の窓口という仕事は、これまで委員会の中で議論はあったものの、まだ現実化していないと言えます。

広報委員会の活動とその意義、更に今後への期待については、前委員長の太田利彦会員がEAJ NEWS No.70 (1999年10月)において鏤々述べておられます。その要点を再録させていただきます、

1. 本委員会の役割は、本会の目的を達成する



ために、必要な情報を会員に伝えるとともに、本会の活動を対外的に報せ、円滑な事業展開に資することである。

2. 法人における広報はその団体としての公式な意思表示を意味し、何か訴えるものがある初めて広報が必要とされる。
3. 広報活動の基本は情報の双方向性にあり、情報の発信のみならず、会員の潜在的なニーズや本会の活動課題などを積極的に取り上げていく必要があるだろう。そのために、広報委員会としても問題の所在を探る嗅覚の鋭さが求められる。
4. 本会がアカデミックな団体であるからには、単なる結果の広報に留まらず、社会的にも何かのインセンティブを与えるような問題提起がされて初めて、本会の広報活動の存在価値があると言える。

ところで、2年程前に、比較的新しい会員の

方々に本アカデミーの活動に関するアンケート調査をさせていただいたことがありました。その結果では、Informationなどの刊行物に対しては貴重な情報として一定の評価が多く見られましたが、その反面、本会の活動そのものについての積極的関心は必ずしも十分でないこと、会員であることのメリットを感じていない方が少なくないことが窺われました。会員へのサービス改善を図るため以前EAJ NEWSに投稿欄を設けることを試みたが活用されなかったとも聞いております。今でもそのような門戸は開かれておりますので、是非折にふれて会員諸氏の率直なご意見をお寄せいただきたく存じます。それとともに、本アカデミーの理事会、各種委員会、専門部会による報告、提言等の成果を発表される際のお助けをすることも広報委員会の役割の一つではないかと考えています。



第116回談話サロン「これからの理科教育の在り方」

伊藤 學 / MANABU ITO

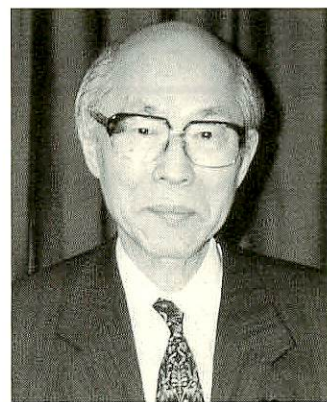
平成12年7月7日夜、東京の弘済会館において、参議院議員、元東京大学総長・文部大臣・科学技術庁長官の有馬朗人先生を講演者に迎え、第116回談話サロンが開催された。演題は「これからの理科教育の在り方」で、時の人による現下関心の的のテーマとあって、台風接近中の悪天候にもかかわらず、60名を超す会員が参集した。

有馬氏はデータに基づく話をと最初に断りを入られた上で、まず国際比較と埼玉県入間地区の調査を例にとって、わが国の小中学生の理科・算数の実力は決して下がってはいないこと、それに対して、高校生・大学生の学力は確かに低下の結果が出ているが、これは若年人口の減少傾向にもかかわらず進学率は年々向上しているという背景を考えれば、ある意味で当然の帰結であると指摘された。加えて、高校生・大学生におけるこの状況は大学入試の変化にも大きな責めがあり、大学生のレベルを下げたくなければ、学生数の大幅減や徹底的なAO入試の採用を考えなければならないのではないかと

述べられた。同氏がそれよりも気掛かりとされたのは、わが国における一般市民の理科の知識の貧困さである。一方、今の生徒達の理科離れの懸念については、これも調査結果に照らせば理数科目に限ったことではなく、

英語・国語を含め努力を要する科目は嫌いという状況に根ざすものと指摘された。次に学校の完全週5日制採用に絡めて、総合的学習科目の意義に触れた上で、必ずしも授業時間が多ければよいというものではないことを、これも調査データを基に示し、画一性と多様性双方の良さを追求することの必要性を強調された。

出席会員にとって関心の高い話題であるだけに、講演後は食事を挟んで多くの質問、感想が会場から寄せられたが、ここで有馬氏は最近の



有馬 朗人氏

わが国における教師と親の権威の欠如を資料によりあらためて指摘された。当日の同氏の発言の中には、この他、エリート教育は必要、日本の大学教育研究における日本人・外国人の区別をなくすべき、など数々のドラスチックな提言が含まれている。時間の不足から、“これから

の”理科教育という点には十分言及していただくことはできなかったが、多彩なご経歴を背景に、持ち前の明晰な話術と示唆に富む主張で場を盛り上げて下さり、極めて刺激的な講演会であった。

新入正会員の紹介

分野（2,1） **石原 直** 日本電信電話㈱物性科学基礎研究所所長

1973年東京大学工学系精密機械工学修士課程を修了、直ちに日本電信電話公社に入社され、一貫して技術研究畑を歩まれた。放射光を用いた半導体微細加工技術の第一人者。X線リソグラフィー技術の開発でも著名。51歳、岡山県出身。

（3） **久保田正明** 通商産業省工業技術院物質工学工業技術研究所所長

1969年早稲田大学理工学系研究科博士課程修了後、通産省工業技術院に入所され、物質の機器分析研究に専念された。わが国の化学標準物質の製造・供給システムの確立に努力され、国際的にも当分野のキーパーソン。59歳、山形県出身。

小島 弦 旭硝子㈱技術本部中央研究所統括主幹研究員

1965年東京大学工学部工業化学科卒業後、旭硝子株式会社に入社され、研究開発部門を歴任。機能性高分子およびフッ素系樹脂研究のエキスパートとして、多くのゴム、塗料、樹脂分野の先駆的製品の企業化に成功。59歳、東京都出身。

（4） **嶋津 孝之** 広島大学名誉教授

1966年東京大学工学系建築学専攻博士課程修了。直ちに広島大学工学部の教壇に立ち、もっぱら耐震構造学を担当された。中国地方で、多年建築士審査や都市の震災対策など、地道な地域活動も展開され褒賞も多数。63歳、奈良県出身。

（5） **西山 孝** 京都大学大学院エネルギー科学研究科教授

1967年京都大学工学系研究科修士課程修了後、同学資源工学およびエネルギー科で教鞭をとられている。いち早く資源経済学の視点に着目され、資源工学に新たな地平を導入。中公新書「資源経済学のすすめ」は好著。61歳、京都府出身。

（6） **川久保達之** 桐蔭横浜大学工学部教授

1963年東京工業大学理工学研究科物理学博士課程修了。同大学で応用物理学を講じられた後、桐蔭横浜大に転ずる。統計物理学における新知見を自励発振回路・流体・液晶等に適用してユニークな成果を挙げられた。68歳、東京都出身。

以上 6 名

<主催・共催行事のお知らせ>

「第2回日本感性工学総会講演会

—21世紀の潮流 感性産業—」(協賛)

会 期：2000年9月14、15日

会 場：工学院大学新宿キャンパス

問合先：日本感性工学会(河村 隆)

T；0268-21-5425

E；kawamura@kappa.shinshu-u.ac.jp

* 初日に大橋 秀雄 会員の特別講演「グローバルエンジニアリング」があります。

「第4回日中韓工学アカデミー

Roundtable Meeting—

Open Session & Reception」(主催)

三ヶ国の工学アカデミーが持ちまわりで主催している円卓会議が、今年はEAJがホストとなり開催されます。全会員、特に近隣地域会員の積極的参加を期待します。

日 時：2000年9月20日 午後

場 所：淡路夢舞台国際会議場

テーマ：IT & Engineering Education

based on Our Common Culture

(EAJ代表基調講演者：大橋 秀雄 会員)

* 詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

「第4回日中電力技術交流会」(後援)

日 時：2000年10月10日

場 所：中国科学技術会堂(北京市)

問合先：(社)日中科学技術文化センター

「日中酵素工学会議」(バイオ専門部会主催)

会 期：2000年10月15～18日

場 所：京大会館(京都市左京区)

問合先：EAJバイオ専門部会

「第7回界面シンポジウム—バイオ・

ナインターフェースの構築とその機能」(共催)

日 時：2000年10月20日

場 所：日本学術会議大講堂

問合先：松永 是(T；042-388-7020)

Royal Swedish Academy of Engineering Sciences(IVA)Kurt Östlund会長ご逝去

スウェーデン王立理工学アカデミー会長 Kurt Östlund会長が、さる6月23日62歳でお亡くなりになりました。

同氏は、1997年11月大阪で開催された第1回日中韓工学アカデミーRoundtable Meetingでご講演いただきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記❖

梅雨も明け、真夏の太陽に悩ませられながら、今事務局では、秋の目白押しのイベントの準備で大変です。

先日会員名簿の現況確認をお願いしたついでに、EAJの会員強化方策および忌憚りの無いご意見をお尋ねいたしました。

7月18日現在352名(595名中)の方々からお返事があり、EAJ会員候補として115名の提示、39通のご意見をいただきました。

予想をくつがえす活発な反響で、大変喜んでおります。有難うございました。

次号にまとめてご報告いたしますが、ご意見をフルに活用すべく、7月19日の理事会に匿名化して速報し、熱心に議論いたしました。各委員会・専門部会にも伝達し、運営に反映していただくよう要請する予定です。

おりしも「日本工学アカデミーの使命」が企画委員会で練り上げられました。(次号紹介)

我々のものとしてのEAJに、引き続いてご参画下さるようお願いします。(得田)



社団法人
日本工学アカデミー広報委員会